

海軍で日本語を学び、戦地へ

キーン 私が初めて京都に来たのは昭和28年ですが、日本語を習い始めたのは戦時中でした。場所はアメリカ海軍の日本語学校です。極めて優れた学校でした。恵まれた資金もあったので、一クラスの学生は多くても6人程度でした。また、私が感謝したのは海軍の学校であっても軍事を学ぶ義務がなかった点です。やがて初めて軍艦に乗った時も、船首と船尾さえ分かれぬ程でした。(笑) 最後まで軍隊については無知なままでしたが、反戦主義者で武器の使用に反対していた私には非常に都合が良かったのです。終戦に至るまで、私は翻訳者、通訳として武器から離れ、出来るだけ平和的に従軍していました。

私の主な任務は日本軍が戦場に遺していた書類の翻訳でした。最初は自分の翻訳で戦争の早期終結に貢献したいと望んでいましたが、徐々に幻滅していきましました。書類といっても無意味なものばかりだったからです。例えば、日本軍の将校の名前を書く任務がありました。人

レクチャー

同志社アーモスト館開館80周年記念講演会 鼎談 「日本、京都への思い」

ドナルド・キーン氏 コロンビア大学名誉教授
冷泉 為人氏 冷泉家時雨亭文庫理事長
北垣 宗治氏 同志社大学名誉教授

名事典もないことから、正確なローマ字も使わず、適当に名前を考えて充てるだけの意味のない仕事などが続きました。そんなある日、私は同僚が避けていた書類を見つけます。それは小さな手帳で、中身は日記でした。日本の軍隊は元旦に手帳を配り、日記の執筆を奨励していたのです。兵士の思想を監視する目的もあったのでしよう。アメリカ軍では日記を厳重に禁じていました。万一、敵の手に渡った場合の情報漏洩を防ぐためです。日本側はどうせアメリカ人は日本語が読めないと考えたのか、それすら考えなかったのか(笑)。

海軍で私と最も親密になった人こそオース・ケリーさんでした。後に同志社大学教授となり、アーモスト館々長となった、みなさんご存知のあのケリーさんです。生まれは北海道の小樽で、お父さん、おじいさん共に日本で長く生活した一家庭です。日本語も普通の日本人と同じ流暢なものでした。しかし、漢字に関しては私が専門でした。子供の時から切手を集める趣味があった私は、漢字も切手を集めるように一つずつ覚えて行き

ました。それは私の喜びでした。

その後、アリューシャン列島、アッツ島の作戦では、私とケリーさんは二人きりで島に上陸し、文字通り24時間を共にしました。そんな極端な状況では仲違いすることも多いでしょうが、私たちは大変、親密になり、その関係は彼が死ぬまで続きました。今も家族との付き合いがあります。

念願の京都へ―

国宝級の下宿で暮らす

キーン ようやく、日本へ留学出来たの

は昭和28年です。私は躊躇せずに京都を選びました。多くの留学生が東京に行きましたが、私は京都が日本文化の最重要都市と考えていましたし、ケリー君がいることも大きな要因でした。

そして、彼は私の期待に添えて、正に国宝級の下宿を見つけてくれたのです。それは今熊野の坂道にあった家で、京都の資産家が昭和の初めに飛騨の高山から京都に移築したものでした。大きな囲炉裏や茶室がある昔ながらの素晴らしい家で、縁側からは人家が一軒も見えず、はるかかなたに泉涌寺の御陵だけが見えま

プロフィール

■ドナルド・キーン氏

1922年、ニューヨーク生まれ。日本文学・日本文化研究の第一人者。古典から現代文学、歴史まで幅広く日本を研究し欧米に紹介している。2008年、文化勲章受章。2012年3月、日本国籍を取得。コロンビア大学名誉教授。

■冷泉為人(れいぜい・ためひと)氏

1944年、兵庫県加古郡稲美町生まれ。関西学院大学大学院文学研究科博士課程満期退学。文学修士。近世絵画専攻。冷泉家25代当主。公益財団法人冷泉家時雨亭文庫理事長。同志社女子大学客員教授。2007年、京都府文化功労賞受賞。

■北垣宗治(きたがき・むねはる)氏

1929年、兵庫県城崎郡香住町(現美方郡香美町)生まれ。同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。文学博士。元敬和学園大学長。同志社大学名誉教授。日本英学史学会会長。国際哲学オリンピック日本組織委員長。2011年瑞宝中綬章受章。

した。本当にこんな素晴らしい家はないと思っていました。

同じ頃、私は日本の伝統芸術を何か覚えたいと思い、自分には狂言が一番合っていると考えて、狂言の稽古をその下宿でやりましたが、どんな大声を出しても文句を言う人もいませんでした(笑)。

2年間の留学が終わった後、私はコロンビア大学に就職しましたが、その後も夏の間は京都で過ごしました。厳しい夏の暑さで知られた京都で過ごすのは正気かと友人からは訝(が)がりましたが、京都に惚れていた私は暑さも平気でした。今でも京都を愛しています。

オーテス・ケリーと

同志社アーモスト館

北垣 オーテス・ケリーさんは1947年から1992年まで同志社でのアーモスト大学代表で、1947年から1979年まではアーモスト館の館長を務めました。そのケリーさんの太平洋戦争中の戦友がキーンさんであったわけですね。したがって同志社とキーンさんの関係とということになると、ケリーさんを抜きに



ドナルド・キーン氏

して考えることはできません。

ケリーさんはアーモスト館の館長でしたから、そのケリーさんのところにキーンさんがしばしばやってきていました。当時、私はアーモスト寮戦後初期の寮生でしたので、キーンさんの座談会に出たり、キーンさんとお話することができたわけです。そういうことで、アーモスト館がなければ、キーンさんは同志社と関係することはなかったのです。

そしてまた、ケリーさんが東山の今熊野にあったその下宿をキーンさんに紹介したからこそ、そこでキーンさんと永井道雄さんが出会い、その友情から、今度は中央公論社の嶋中鵬二さんとのつながり

りができ、キーンさんがそれまで書いてきたものが、中央公論社から次々と出版されるようになりました。のみならず嶋中さんの紹介で、谷崎潤一郎先生をはじめ、川端康成、吉田健一、三島由紀夫、安部公房といった人たちとの友情が生まれていったわけです。

ということで、アーモスト館80年の記念行事にはぜひキーンさんに来ていただきたいと考え、私が頼めば、よもや断わられることはないだろうと(笑)。実際、その通りになりました。キーンさんは間もなく90歳になられるわけですが、本当はこういう老大家を引っ張り出すのは私の本意ではありません。しかしアーモスト館にとつては本当にありがたいことだと思つています。これだけの聴衆が来てくださる、これは一種のマジックです。「ドナルド・キーンは魔術師である」と私は思つています(笑)。

生涯の友

永井道雄さんとの出会い

司会 キーン先生は、そこまで京都に思いを馳せて、京都に来たいと思われた。

学とは過去のもの、古典こそが文学であるとの考えです。ケンブリッジでは近代、現代の文学はまったく教えておらず、図書館にも近代、現代文学の本はありません。どうしても読みたければ自分で買って読むという共通の認識がありました。私は日本でもその伝を貫こうと、まずは芭蕉の研究に専念し、それ以外は京都を知ろうと努めました。しかし、永井さんの影響を受け、現代日本を無視出来ない

と悟つてからは一緒に芝居を観に行つたり、選挙の演説会に参加するとか、さまざまな経験を積むようになりました。こうして、現代の日本と当時の日本文学は私に取つて非常に重要なものとなつていったのです。

そんな中、大変幸運な出来事がありました。同じ海軍日本語学校の出身の学者で友人のサイデンステッカーさんが『細雪』を翻訳したのですが、彼はなぜか日本の郵便局を信用せず、私と同じ京都に住む谷崎先生に翻訳原稿を持つて行つて直接に渡して欲しいと頼まれたのです。

私が谷崎潤一郎と会つたのは、そんな成り行きでした。まずは奥さんに連絡を

京都のどのようなところに一番魅力を感じられたのでしょうか。

キーン 京都でまず好きなのは周囲に山が見えることです。当時、自分がどこにいるか分からなくなると、遠くの山を見たいものです。すると、「ああ、あそこに東山が見える、大文字が見える」と分かりました。それが私にとつては大変、魅力的でした。それに私が初めて来た頃は車が少なくて、自家用車もほとんどありませんでした。

また、文学や演劇と関係のある場所に行つたり、お寺を訪ねて、著名な人々のお墓参りもしました。とにかく、京都のすべてを理解したいと思つていたので、他の町ならそれも可能かも知れませんが、京都では何年かかっても完全に把握出来ない、そんな魅力がありますね。

そして、この国宝級の下宿で重要な人と知り合うのです。私は離れに住んでいましたが、母屋に京都大学の学生でアメリカ帰りの人が入つたと聞かされて落胆しました。きっと英語の練習をさせられるとか、アメリカで持つていた豪華な車のお話を聞かされるのでは、と。そこで、

取り、下鴨にあつた上品なお宅に伺いました。夏の暑い盛りのこと、庭から聞こえる変わった音は鹿威しだと後で知りました。また、床には台湾から運ばれた特製の座が敷いてあつたことも覚えてます。

こうして私は現代日本文学の世界に入つて行きました。当時は誰も意識していませんでしたが、あの頃は正に日本文学の黄金時代でした。しかし、人はそれに気づかず、誰もが文学の不在を嘆き、「読むものがない」とこぼしていました。しかし、実際には谷崎だけではなく、同じく大家の永井荷風や志賀直哉も健在で執筆を続け、円熟期にあつた川端康成はもちろん、まだ若手だつた三島由紀夫、安部公房といった次世代の作家もぼつぼつ台頭し始めていました。谷崎潤一郎が発表した『鍵』は大きな反響を呼び、本屋には列が出来て、人々は連載誌の『中央公論』の名ではなく、『鍵』をください」と言うほどでした。三島由紀夫の『仮面の告白』はこんな最中に発表されましたが、あの頃が平安朝や元禄時代にも匹敵する日本文学の黄金時代であつたのは間



冷泉為人氏

現代日本文学の世界へ

キーン 私は日本に来る前の5年間、イギリスのケンブリッジ大学で教鞭を取つていましたので、すっかりイギリス風の常識に染まっていました。すなわち、文



北垣宗治氏

違いありません。

狂言で言葉の「間」を覚える

北垣 若い頃、キーンさんは京都の等持院のあたりに住んでおられて、あるとき大好きな龍安寺の縁側に腰掛けて、ずつとお庭を見ていたんですね。そうするとちよつと音がしたので振り返ると、龍安寺の和尚様の奥様が、そつとお茶を出して静かに下がっていかれた。この話を聞いた時、これが日本人の心ではないかと私は思ったんです。

冷泉 まさにそうだと思いますね。限りなく「推し量る」ということが大事だと

思いますね。鴨長明は『無名抄』の中で、そういうことをちゃんと言っています。それを私は「点線思考」と名付けているんですけど、間が「実線」ではなく、「点線」であるけれども、実線のように全体を見分ける精神がなければならぬということなんです。

大学では学生に分かりやすく説明するために、「間」というのは、皆さんも知つての通り、それが抜けているのを「間抜け」と言うし、「間が悪い」というような言葉にもなつているのだから、「間」というのは非常に大事だ」ということを言っているわけです。

そんな中、いま述べているような「限りなく推し量ること」が、現代人にはできなくなつてしまつたのかなと思つていたらと、近年は「KY」という言葉が流行つてくるようです。「空気が読めない」と言うことは、まさに「推し量れない」ということではないかと。龍安寺の奥様が、ちよつとお茶を出されて、すつと退かれるというのは、なかなかできることではないと思つたんですね。

キーン 私が「間」を覚えたのは狂言を



すが、いかがでしょう。

冷泉 そちらの方は芸事などでもあると思つたんですが、「道」ということですね。人間の道徳というか、倫理ですね。芸事に「道」を付けると

いうことが、その一つの表れではないかと思つています。そこではやはり「型」が大事ではないかなと。「道」と付く伝統

芸能、お茶、お華香、そして歌の道もそうですし、剣道とか柔道に至るまで、「道」と付くものは「型」を持つていてということではないかと

通じてです。私に取つては狂言の稽古は実に大切でした。これはテープレコーダーもない時代の話です。お能の場合は謡い本がありますが、狂言にはそれがなく、教則本のようなものはありませんでした。では、どのように覚えたかというところ、お師匠が口にする文句を鸚鵡返しにするだけですが、何度も覚えるまで。そして次の文句へと。相当に時間がかかる方法ですが、こうして私は「間」を体得しました。書かれた文章を読んで頭で理解するのではなく、自分の身体に「間」を取り入れたのです。どんな場面でもどんな発声をするか、例えば太郎冠者が驚いた時に「はて」「面妖な」と言う「間」を。日本のすべてを学ぼうとしていた当時の私の生活の中でも狂言が一番、楽しい経験でした。

すべてのこと「型」がある日本

北垣 「推し量る」とか「間」ということに加えて、日本人のアイデンティティというようなことを議論する場合にも、もう少し道徳的な面で日本人の特性はないものかというのが私の率直な疑問なんです。

思います。柔道では、オリンピックなどで色の付いた柔道着が出てきますが、あれは本来の日本の柔道ではないと思つた。スポーツになつてきている。そういうことが、伝統芸能の中の倫理観ではないかと思つた。キーン先生は、そのあたりはいかがですか。

キーン 何事であろうと、「型」を極めるのは日本人にとつて非常に重要です。私自身、日本のあらゆる分野において、あるべき「型」を知りたい、極めたいという気持ちも強くあります。人が亡くなつた場合でも、どのように遺族を訪問すべきか、どんなおみやみの言葉を使つか、といったことでもしかるべき「型」があるでしょう。涙を見せることが死者への礼儀とする国もありますが、日本の場合は「礼」の伴う「型」が重要です。それも「型」ばかりで「誠」がないということではなく、「型」は「誠」の一部なのです。

昔の日本人、特に宮廷に仕える女性が文をしたためる時、最初にしたのは紙の選定でした。状況と相手を考慮した上で使う紙を選ぶのです。使う文字や仮名の



字体はもちろん、墨の濃淡までを十分に吟味します。手紙を書いた後には、きれいに紙を折って、季節の花を添えます。最後にその手紙を小姓に託すまで、何かから何まで抜かりなく準備します。西欧では、重要なものは「あなたを愛しています」という想いを書き記すだけ。それで十分でした。紙の質が考慮されることはなく、字が綺麗すぎれば、逆に醒めた感じを与えるのか特には必要とされませんでした。手紙に何よりも重要なものは字の綺麗さではなく、「愛している」という強い思い、強い力が感じられる何かでした。それは日本とは全然違うやり方、考え方でした。

翻訳の力を信じて 日本文学に取り組む

司会 日本文化というのは世界でも独特なものだと思うのですが、これは日本人にしか分からないことなのか、それとも伝え方によつては世界の人々に理解されるのか。アメリカ人であつて日本の文化をずっと研究されてきたキーンさんは、どうお感じになりますか。日本文化のロカル性とその普遍性をどのようにお考

えてでしょうか。

キーン 私の生涯の仕事の要はまさにここにあります。私が日本の研究を始めた頃、先輩は一人だけでした。英国人の翻訳者アーサー・ウェイリーです。ウェイリー先生は『源氏物語』『枕草子』の見事な英訳を残しています。彼の翻訳は英語そのものが綺麗でした。今から100年前の作ですが、現在の人にはもうこんな英語は書けません。しかし、ここで重要なのは、日本の文学作品であろうとも、外国人にも必ず理解できる筈だという信念です。私もウェイリー先生と同じ思いを抱いていました。

また、ウェイリー先生の翻訳には誤りも含まれています。しかし、それは意図的なものでした。例えば、部屋の上に女性が座ることは平安朝では当たり前ですが、当時の英国では女性が床に直接座ることはあり得ません。したがって翻訳には椅子が出て来ます。このような意図的な「誤り」は文化の溝を埋める為の方便ですから、私には受け入れられます。無為な誤りではないからです。

そんな葛藤があつても、翻訳では常に

のです。

また、こんな経験もありました。数年前、ポルトガル領のマデイラという大西洋の小さな島に行った時のことです。到着した日は偶然にお祭りの日で、公園に並ぶ露店の中には本屋もありました。そして、店の中心で最も目立つ所には、まるで神棚に供えるように『源氏物語』のポルトガル訳が飾られていたのです。大西洋にあるほとんど誰も知らない島でも『源氏物語』が読まれていたのです。

日本人の中には「原文でなければ『源氏物語』を理解できない」という人がおられたら、それは一つの確かな見解であると思います。しかし、翻訳された外国語でも、細部に至るほぼ全ては理解できますし、物語の真髄は十分伝わります。でも、翻訳の意義を否定するなら、「聖書」はどうなるでしょう。キリスト教信者の何人がアラマイック語、古代ヘブライ語、古代ギリシャ語を自在に読めるでしょうか。すべての人は翻訳を通じて『聖書』を読んでいきます。ロシア語を知らなければトルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフが理解できないでしょうか。翻

訳では分からないと言ふのなら、多くの人の貴重な文学体験も意味が無いということになります。

「型」を守ること、破ること

北垣 キーンさんも冷泉さんも「型」の大切さを大変強調されましたが、「日本人は型にはまったことさえしていればいいと考え過ぎる」というのがケリーさんのいつもの主張でした。日本人が同じような服装をして、同じような灰色のネクタイを締めているというのは、ケリーさんにはたまらなかつた。日本の学校へ行くとみんな同じ制服を着ている。初めのうちアメリカ進駐軍は「日本は警察国家なのか」と言った、というくらいです。「型」の大事さは分かりますが、では「型」だけ守っていれば、それでいいのでしょうか、という質問です。

冷泉 会場にはお茶をなさつておられる方もたくさんいらっしゃると思いますが、お茶の世界で「守破離」という言葉があります。「型」を守つて、つまり先生の言うことを守つて、そして次が「破」ですが、それを破つて、そこから離れてい

一つの信念を抱き続ける必要があります。それは「外国人にも理解できる」ということです。言葉遊びのような翻訳不可能な文章はどこにもありません。しかし、真の文学、特に一流の文学作品となれば、必ず翻訳で伝えられると私は確信しています。

『源氏物語』は今ではあらゆる言語に翻訳されています。数年前、京都で源氏物語の千年紀があり、世界各国の翻訳者が一堂に会しました。中央アジアの翻訳やヨーロッパ各国の翻訳も拝見しましたが、それぞれの国の読者は、日本の一般人の人よりも内容を良く知っていると見える側面があります。それは彼等が楽しんで『源氏物語』を読んでいることに起因します。というのも、日本では『源氏物語』は文法として教えられ「ぞ」で終われば係り結びであるとか、勉強に終わるだけで、学生の重荷にしかかっていません。その一方で、なぜ『源氏物語』が世界の古典になり得たか、また、その本当の魅力を訊ねても学生は答えられませんが、おかげで『源氏物語』の良さをより良く知るのは外国人という現象さえある

くと、その人の個性が出てくる。こういうふうにお茶の世界では言うわけです。

基本形を真面目に繰り返し繰り返し稽古していると、そこから個性というものが生まれてくるのではないかと私は思います。ですから「型」というのは両刃の剣だと思えます。家法とか家格とか、そういうものを伝えていくことにおいては有効な手段ですが、形骸化するという弊害が一方にはあるのではないかと思います。そうならないためには、どうしたらいいかと考えながら、日々真面目に稽古するしか方法がないのではないかと思います。そしてそれが成就したときには、まったく個人的なものが、そこにきちっと確立されているのではないかと私は思うわけです。

世界が日本を認識するようになった

司会 いま日本の人たちは、震災があったり、景気が悪かったりして、自信をずいぶん失っています。しかし一方では、日本の文化が徐々に世界に認識され、さまざまな日本的な感性や美的感覚のようなものがサービズや商品となって世界に

流通していると思います。日本の美を研究されてきたキーン先生は、これから世界が、日本の美意識や感性をもっと深く知るようになっていくとお考えになりませんか。

キーン 日本は敗戦を経験しましたが、結果として日本文化は勝利を得ました。それまでは日本は非常に遠い国にすぎず、アメリカ人が「外国に行く」と言えばヨーロッパを意味しました。日本に行く人は極めて少なく、日本語もアメリカの一部の大学でしか教えられていませんでした。ハワイやカリフォルニアなど日系人の多い地域か、東海岸の2、3の大学だけでした。

しかし、現在はアメリカでも様々な地域で日本語が教えられています。ヨーロッパでも昔は日本語を教える国は、せいぜいフランスとドイツぐらいで、イギリスでさえも教えていませんでした。しかし、幸い今では日本語は別の惑星の言葉ではありません。(笑)

戦前、海外にあった『世界の詩歌』という本には日本の詩歌は一つも入っておらず、せいぜい加賀千代女の歌が一つ出

ている程度でした。しかし、今では『万葉集』や『芭蕉』も入ります。短編小説も同じです。以前は『世界の短編小説』の中に、日本の短編は一つもなかったのですが、今ではそこにも紹介されています。

このように不幸な大戦の後には、逆に世界が日本を認識することになりました。日本については、まだまだ十分知られておらず誤解もありますが、戦前の状況とは比較になりません。今ではアメリカ人の大多数は日本に信頼を置いています。それは戦前にはあり得ないことでした。それほど時代は変わったのです。そして自分のことで恐縮ですが、私の今までの仕事もその傾向に貢献したと思いたいです。

日本人は東北にもっと支援を

キーン 私の心からは東北の災害が消えません。新聞、TVには被災者の近況が報告されても、すでに災害を忘れた日本人もたくさんいます。一般の日本人がなぜもっと積極的に震災の被害者を支援しないのか、私には実に不思議です。アメ

(※注)

※① アツツ島作戦
太平洋戦争中期の1943(昭和18)年5月12日、日本軍が占領していたアリューシャン列島のアツツ島に米軍が上陸し、17日におよぶ激しい戦いの末、日本軍守備隊が全滅した戦い。日本軍に2638名、アメリカ軍に約6000名の戦死者を出した。

※② 国宝級の下宿
同志社校友の奥村虎之助氏の祖父が飛騨高山から東山区今熊野へ移築した古民家。約700年前に平家の落武者によって建てられたと伝えられ、キーン氏は1953年から約2年間ここで暮らした。この家屋は1979年に同志社へ寄贈。移築され、「無賓主庵」という名称で賓客のもてなしや国際交流に利用されている。

※③ 同志社アーモスト館
新島襄の母校、米国アーモスト大学の関係者・卒業生からの寄付により1932(昭和7)年に竣工。当時のニュ

リカからも多くの機関や民間からの援助が寄せられ、ニューヨークのジャパン・ソサエティから東北の被災地に1000万ドル以上の援助金が送られました。しかし、日本国内ではあまりそんな話も聞きません。被災地の復興の状況も十分、報道されているとは言えないでしょう。

それどころか、「福島で出来た野菜は危ない。西日本の野菜しか食べない」という人さえいます。私はそんなことはとても言えません。日本人は今こそ同じ日本人、被災者となった人々をもっと積極的に支援しなければなりません。東北の被災者が住む家は雨露をしのぐだけの仮設住宅にすぎず、英語でいうHomeではなく、あの子を見れば何とかしたいと思います。ぜひ、みなさんも被災者を忘れないでください。

(2012年6月2日、栄光館での鼎談を編集して掲載)

ーイングランド・ジョージアン様式の建物で、設計はW・M・ヴォーリス。竣工当初より長期にわたり学生寮として使用された。2009年5月からは、主に外国人研究者の宿泊施設として利用されている。

※④ 永井道雄(ながいみちお)
1923―2003年。京都大学卒業後、米国へ留学。帰国後、京都大学教育学部助教授、朝日新聞社論説委員を経て、1974―78年、三木内閣で文部大臣を務める。文相退任後は、国連大学学長特別顧問、国際文化会館理事長を歴任。

※⑤ 嶋中鵬二(しまなかほうじ)
1923―1977年。1935年、東京高等師範学校附属小学校卒業。同級に鶴見俊輔や永井道雄らがあった。東京大学文学部卒業後、戦時中は中島飛行機の研究所に勤務。戦後、父・兄が相次いで死去したため、26歳で中央公論社社長に就任。総合雑誌『中央公論』を中心に戦後の出版界を牽引した。